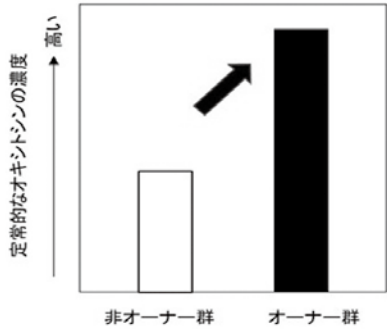


ロボットを介した美肌アプローチの創出へ

コンパニオンロボットと共同生活を送る人は オキシトシン値が高いことを発見

資生堂は、GROOVE X社との共同研究、麻布大学 獣医学部 動物応用科学科 菊水健史教授、自治医科大学医学部神経脳生理学 部門・応用倫理学研究室 岡部祥太客員研究員による技術指導により、家庭においてペットや家族のような役割を果たす「コンパニオンロボット」と共同生活を送る人は、共同生活を送らない人に比べて、体内のオキシトシンホルモン(オキシトシン)値が高いことを明らかにした。同社では、肌で産生されるオキシトシンが表皮の再生を促すことを明らかにしており、研究成果を応用して、ロボットなどの「コミュニケーション」によるオキシトシンを介した新たな美へのアプローチを創出することを目指す。研究成果の一部は、第100回生理学学会(2023年3月14〜16日)にて発表した。



実験は、コンパニオンロボットとの共同生活による体内のオキシトシン濃度への影響

同社は、肌本来の美しさを引き出すには体内と肌の密接な関係にあることを明らかにしている。神経に着目した研究では、肌へのやさしいタッチにより肌内部のオキシトシン分泌が増加すること、肌由来オキシトシンが表皮の再生を促すことを明らかにしている。そこで今回の研究では、オキシトシンやコルチゾールといったホルモンに着目し、非生物とのコミュニケーションが全身へ与える影響を明らかにすべく研究を進めた。まず、短時間のコンパニオンロボットとの触れ合いが、ストレス状態を改善することが示された。また、オーナー群でより顕著にコルチゾールが減少しており、これはコンパニオンロボットと日常的に親密な関係性を築いていることにより、触れ合いによるストレス改善が起きていると推察されている。

「共感」という言葉に、情緒的な共感「シンプシー」と経験的・認知的な共感「エンパシー」の2種類があることを知ったのは、恥ずかしながら、SDGsが様々なメディアで頻繁に取り上げられるようになった2〜3年ほど前のことである。「共感」は、理解の意図合いを包含する。エンパシーがイマドキな価値観として求められていることは明らかである。なるほど、エンパシーで捉えると新しいことも含め様々なことに對して寛容になれる。しかし、どこか他人のよつで当事者意識で、今では商品の不可

共感を分ける

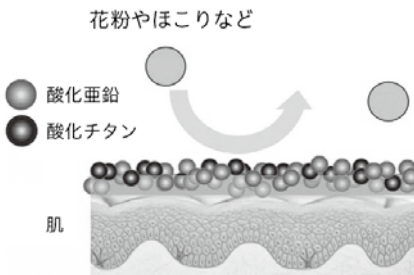
私のH & B日記

「共感」という言葉に、情緒的な共感「シンプシー」と経験的・認知的な共感「エンパシー」の2種類があることを知ったのは、恥ずかしながら、SDGsが様々なメディアで頻繁に取り上げられるようになった2〜3年ほど前のことである。「共感」は、理解の意図合いを包含する。エンパシーがイマドキな価値観として求められていることは明らかである。なるほど、エンパシーで捉えると新しいことも含め様々なことに對して寛容になれる。しかし、どこか他人のよつで当事者意識で、今では商品の不可

王肌への微粒子の付着抑制で 花刺激を感じにくくなることを確認

花王は、ほこりや花粉などの微粒子の肌への付着を抑制することにより、肌にもが触れることに対して敏感意識のある肌で、5 Hzの電流知覚閾値(いきち)(CPT値)が高くなり、刺激を感じにくくなることを確認した。今回の研究成果は、第5回日本フォトターマトロジー学会 学術大会(2022年11月18〜21日・東京)にて発表した。

オキシトシンとコルチゾールは、ストレス状態を改善することが示された。また、オーナー群でより顕著にコルチゾールが減少しており、これはコンパニオンロボットとオーナーが日常的に親密な関係性を築いていることにより、触れ合いによるストレス改善が起きていると推察されている。



肌への微粒子付着を抑制する技術(イメージ)

また、オーナー群と非オーナー群の起床時の尿を3日間採取・測定し、その平均値を日常的な体内のオキシトシン濃度として、両群の体内のオキシトシン濃度を比較すると、オーナー群がより高い値を示すことが明らかになった。つまり、普段からコンパニオンロボットと接することにより、他者やペットと接する時と同様に、オキシトシンを分泌する機会が増え、日常的变化をもたらす、新たな体内外のオキシトシン濃度も増加する可能性が示唆された。

ポーラ化成

新技術でUVカット効果を 高めつつ、きしみ感も回避

ポーラ化成工業は、使用中の心地よさを確保しつつサンスクリーン製品のUVカット効果を向上させる技術の構築に成功した。この技術は、空気中の大気汚染成分を分解して得られる成分をつまく利用することで実現した。

肌には、膜を固める手段が主に使われてきたが、この方法では、膜の硬さがきしみ感などにつながるため、心地よさとの両立が難しいという面があった。そこで今回は、「膜の心地よさ」と「UVカット効果」を両立させる技術を開発が行われている。これまでの研究

と膜の厚みが増すことを突き止めており、自社で独自開発したUVカット粉体(シリル化シリカ)が、溶液中のイオンと反応することで凝集し互いにつながって大きな構造を取るようになること、この粉体を含む膜に均一に塗布し、酢酸イオンを含む水溶液(0.5%酢酸水溶液)を霧状にして吹きかけ、その前後の厚みとUVカット効果を計測した。その結果、水のみを吹かけても膜は厚くなり、酢酸イオンが生じると「同様の反応が起こる」とが期待される(同社)という。